

「今日の診断指針」

亀山 正邦 京都大学教授
 亀田 治男 東京慈恵会医科大学教授
 高久 史麿 東京大学教授
 阿部 令彦 慶応義塾大学教授

総編集

病院管理研究所部長

岩 崎 榮

日常診療の中で、必要とされる医学知識や医療技術は、今日の如き日新月异の医療革新の世では余りにも多いものとなり、何をどのように補ってよいものやら皆目わからない。

そのようなとき、今回出版された「今日の診断指針」は、このような医師たちへの道しるべともなうかと思われる。

その意味からは、本書が、医師の生涯教育のための指針ともなり得べきものであり、ややもすれば、日々薄れいく診療知識を回復させることにも役立つものである。また、同時に、生涯教育のレベルの設定にも応用できそうである。

本書のねらいは、全科的な、総合的なインテグレートされた知識と技術をほどよく配置し、高学年の医学生や臨床研修医、一般医師に向けられての記述であるが、レベル的には医学生の卒業時におけるミニマム・

リクワイアメントとなっているようである。

すべての医師がこの程度のものの知識、技術を身につけてほしいとのねらいもこめられての編集であろうと推察する。

このことから、今日的に言われるプライマリ・ケアを指向したものでアップ・トゥ・デイトであるといえる。

また、現在持っている自己の医学知識・医療技術をセルフ・チェックするうえにも使えるように分類されていて、重要な所には傍線が引かれ注意を喚起している。

少なくとも、医師たるものこれだけのことは、知識として、技術として持ったうえで、自分の専門をより深めてほしいものである。

“これしか知らない”専門医を一掃するためにも、是非、座右の書として診療机に置き、日常的に目を通

してほしい本書である。

図がふんだんに使用されていることも本書の特徴で、しかも、ほとんどが実物図である。最初の症候編では、カラーであり、この種の書物では最大限に挿入されているにも拘らず、手ごろの値段であるところがよい。

しかし、部厚く、重量があり、持ち運びに難がある。あくまで、診察室やカンファレンス室に置いての使用に便である。

惜しむらくは、このことは、わが国の医学書では普通のことであるが、症状や症候、疾患の発生頻度の記述において、統一性がないようだが、現時点では仕方ないとしても、この方面での、更なる研究が進められるべきであるが、恐らく執筆者諸氏も感ずかれたことと思う。総合的な研究が望まれるところである。

しかし、この点があったとしても、本書の有用性には何らの影響を及ぼすものではない。

本書は、あくまで実践の医学書である。

しかも、医学の総合性が成就されている。バラバラにインプットされた知識や技術を上手に統合する役割を果たしてくれそうである。

B5 1,566頁 図320 写真1,014
原色図221 1985 ¥19,000 ㊦600

医学書院 刊